



なぎさは海のゆりかご

海のゆりかご通信 No.11 Jul.2010

～ 藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ帯・浅場… 「なぎさ」は人と海との共生の場 ～

「なぎさシリーズ」

今回の旅は、広島県尾道市。古くは港町として栄え、「東京物語」など数多くの映画の舞台にもなった地。今も渡し船が行き通う尾道水道の東側に、潮が干くとあらわれる「山波の洲（さんばのす）」を、ライターの新美さんが訪ねました。

なぎさシリーズ No.8

アサリの宝庫「山波の洲」を守り続ける漁師さん

新美貴資

雨のなか干潟へ

今回、訪れたのは広島県尾道市。その地先にひろがる松永湾で、地元の漁師さんが取り組んでいる干潟の保全活動取材した。

ちょうど梅雨の時期とあって、天気はどんより曇り空。尾道駅に着くとポツポツと雨が降り始める。7月とは思えない肌寒いなか、活動を行っている漁師さんグループのもとへと向かう。この日は干潟のモニタリングが行われ、夕方からのアサリの採取に同行させてもらうことに。待ち合わせ場所の漁港へ急ぎ足で向かうと、松永湾で

はえ縄漁などを営む伊勢本高喜さんが笑顔で迎えてくれる。



モニタリングを行う干潟は陸続きではないため、伊勢本さんの船に乗せてもらった移動だ。他のメンバーの方々はすでに干潟で待っているとのこと。用意してくれた長グツと防水ズボンを急いで着て、目指す干潟へと出発した。

大切な漁場。大切なレジャーの場。

瀬戸内海のほぼ真ん中、広島県の東南部にある尾道市は、古くから海運で栄えた港の街である。その尾道市と隣の福山市に囲まれた松永湾では、一本釣りや採貝、刺網

	都道府県:	広島県
	地域協議会:	広島県漁場環境・生態系保全協議会
	活動組織名:	尾道地区干潟保全活動組織
	協定先:	尾道市
	構成員数:	88名
	対象資源:	干潟
活動内容:	計画づくり、モニタリング、機能発揮のための生物移植など	

などの多様な漁業が営まれている。その松永湾にあるのが、今回の舞台となる干潟「山波の洲（さんばのす）」だ。沿岸域の埋め立てが続いてきたなかで、今も残る貴重な干潟であり、湾内で漁を行う漁業者によって自主的な管理が行われている。

干潟の広さは約 18 ヘクタール。手掘りや鉄製のツメのついたカゴで海底をさらうジョレン掘りでアサリを収穫する。釣りの餌となるエムシもとれるそう。資源をとりすぎることがないように、操業期間や1日に収穫できる量にも制限が設けられ、小さなアサリをとらないようジョレンの目合いも決められている。また、一般にも潮干狩り場として広く利用されており、海とふれあう市民のレジャーの場にもなっている。



モニタリングで現状を把握

伊勢本さんの船に乗って「山波の洲」へ向かう。遠浅な湾内は波もほとんどなく、とても穏やか。降り続いていた雨もいつの間にか止んで、空も幾分明るさを取り戻したよう。干潟にあがると、雨に湿った砂浜が遠くまで広がり、何人かの一般客が夢中でアサリを掘っている。

先に着いていた漁師さん、そして瀬戸内海区水産研究所（百島実験施設）、広島県庁、尾道市役所の担当の方と合流して、こ

の日の干潟のモニタリングが始まった。漁師さんが3人ずつ2つのグループに分かれ、決められている4ヶ所のポイントへそれぞれ移動して、干潟の生き物を採取する。25センチ四方のワクをポイントの砂浜にしっかりと固定。ワクのなかにスコップを差し



込んで、深さ 25 センチぐらいまでのところの砂泥を掘り出し、網目のついた「とうし」でふるいにかけてアサリを選別していく。昨年 10 月から干潟の現状を把握しようと始まったこのモニタリング。今回が7回目ということで、漁師のみなさんも作業になれた様子でなんだか楽しそうだ。採取したアサリを見せてもらう。4センチ近くの大きなものから小指のツメぐらいのものまで、ふるいにかけて砂のなかからは、たくさんのアサリが姿をあらわした。

「今日は多いね」「洲のなかでも、貝のいる所といない所があるよ」。アサリを採取しながら、いろんな話が交わされる。これまでのモニタリングから、どうも干潟には



生息に適した場所とそうでない場所があるらしい。どうやって移動するのか想像もつかないが、好みの環境ではないところに放流されたアサリは別の場所へ移ってしまう、といった面白い話も聞いた。



「モニタリングは回数を重ねることが大事」と話すのは平林定成さん。この活動を始めてから、漁業者の干潟やアサリ資源などそこに生息する生き物への関心はさらに深まり、環境への意識も高まっているとの印象を受けた。

たくさんの生命を育む干潟

干潟にいるのはアサリだけではない。いろんな生き物を見つけることができる。なかでもよく目についたのが、お椀のような形をしたツメタガイの卵。ツメタガイはアサリを食べてしまう、漁師さんにとってはとても迷惑な貝だ。この他にも、干潟やその周辺には、アカニシやエイ、クロダイ、ヒトデなど、アサリを捕食する生き物がた



くさんいるという。一昨年はヒトデが異常発生し、アサリの漁獲量は大きく減少した。漁業者はアサリの安定した収穫を図るため、こうした生き物の除去にも力を入れている。

干潟の浅瀬からすこし沖へと目を移すと、一面にアマモ場が広がっている。魚の産卵や稚魚が育つ場として、重要な役割を果たす海の森である。「アマモのない海は汚い海」と話す伊勢本さん。2年前から回復しているアマモ場に、海の環境が良くなってきているのではと、期待を寄せている。

また、このアマモ場によって思わぬ効果がうまれていることを尾道東部漁協の組合長でもある恵谷一雄さんから聞いた。生い



茂ったアマモによって漁獲から守られたアサリが成長し、親貝となって干潟全体の資源を潤しているというのである。「アマモがなくなったら『山波の洲』は死の干潟になってしまう」と恵谷さん。藻場は魚だけでなく、貝の育成にとっても欠くことのできない大切な場所となっている。

足もとの潮だまりへと一歩すすむと、たくさんの小さな魚がにぎやかに泳ぎだす。多くの生き物を育む「山波の洲」とその周辺のアマモ場は、漁業生産だけでなく、松永湾全体の生態系のバランスを維持する重要な役割もきつと果たしているのだろう。

強い雨に降られることもなくモニタリン

グは順調に進み、この日の作業は2時間ほどで終わった。採取したアサリはポイントごとにビニール袋に入れて持ち帰り、翌日に室内で個数や重さ、殻の長さなどを記録。今後の干潟の保全活動を進めるうえでの基礎データとして活用されることになる。



干潟が復活すれば海は良くなる

湾内で漁を行う漁業者によって管理されてきた「山波の洲」。昨年は「尾道地区干潟保全活動組織」も新たに結成され、残された干潟を守り、豊かな海をとりもどそうとする機運がさらに高まっている。

アサリの資源管理や食害生物の除去など、一年を通して干潟の管理には多くの人手と時間がかかる。取材でうかがった活動組織の漁業者の多くは、サラリーマンなど陸での仕事を引退して地元にもどってきた人々。そうした漁業者が採貝漁業などを営みながら、「山波の洲」の保全にも率先して取り組み、海の環境を守る活動の中核を担っているのである。

今回、話をうかがった恵谷さんもその一人。かつてはたくさんの魚や貝がとれたという松永湾。「山波の洲」でとれるアサリも平成元年以降は大きく減少し、今年も不漁だという。それでも「干潟が復活すれば

海は良くなる」「山波の洲はアサリの宝庫」と力をこめて話し、今後の干潟の保全活動にも意欲的だ。その他にも、アマモなどの海藻が昔は畑の肥料に使われていたこと、干潟は耕さないとアサリが育たないことなど、興味深い話をたくさんしていただいた。

漁師のみなさんとの一つ一つの会話から、地元の海、干潟を守り続けていきたいという思いがひしひしと伝わってきた。海や干潟はそこで暮らす人々の生活そのもの。このことを、自身の肌で感じることができたことは大きな学びであった。干潟や藻場を守ることは、海の環境を守ることにつながる。干潟の保全活動に取り組むみなさんの生き生きとした表情がとても印象的だった。



～ 著者プロフィール ～

新美貴資 (にいみたかし) 氏
フリーライター
水産ジャーナリストの会会員



伊勢・三河湾を中心に漁業・漁村の現状と活性化に向けた取り組みの取材を展開。また、東海エリアにおける地産地消の取り組みの情報発信などを手がける。

【一言メッセージ】

たくさんの生き物を育む干潟のすばらしさに感動！
その干潟を守り続ける漁業者の活動から、人と海との結びつきの深さを改めて感じた。

技術をみがき・学ぶ「技術講習会」の開催

環境・生態系保全対策に参加する・検討されている方々を対象に、環境・生態系保全活動の技術をみがく・学ぶための「技術講習会」を開催します。

現在、多くの活動者が悩む「モニタリングの考え方や方法、結果の見方・etc」を中心に研修を行います。ご応募お待ちしております。



会場	開催日程
干潟	三重会場 終了しました。
ヨシ帯	茨城会場 終了しました。
干潟 浅場	広島会場 終了しました。
藻場	三重会場 07月27日-07月28日
藻場	北海道会場 08月24日-25日
藻場	鹿児島会場 10月下旬-11月上旬で調整中
サンゴ	沖縄会場 9月以降で調整中(10月下旬第1候補)

●詳細情報は！

JF全漁連ホームページ

「環境生態系保全活動サポート情報」サイトへ

http://www.zengyoren.or.jp/env_support/index.html

ひとつみ.jp

トップページ「イベント情報」へ

<http://hitoumi.jp>



●お問い合わせ

JF全漁連漁政部 環境生態系チーム

Tel: 03(3294)9616 Fax: 03(3294)3347 e-mail: k-support@zengyoren.jf-net.ne.jp

●干潟・浅場・ヨシ帯・サンゴ礁講習会申込窓口：株式会社 水土舎 吉永、野口、かしい

Tel: 044(922)3265 Fax: 044(922)9369 e-mail: yoshinaga@suidosha.co.jp

●藻場講習会申込窓口：社団法人 水産土木建設技術センター 安藤、石岡

Tel: 03(3546)6858 Fax: 03(3546)6826 e-mail: w-ando@fidec.or.jp

～ 編集後記 ～

尾道地区干潟保全活動組織の取材日の前日に、環境・生態系保全活動支援推進事業の一環で、山波の洲を舞台に干潟・浅場技術講習会が2日間にわたって行われました。この講習会に講師として招かれた瀬戸内海区水産研究所の浜口昌巳先生の講演で興味深いお話が聞けました。

「二枚貝をはじめとする干潟の生き物の維持や再生は、昔と違って資源が減少した今は、手間ひまかけないと実現できない」。また、「干潟だけみてもダメ。その周囲の河川や海など広域にみる必要がある」とお話しされました。

日本各地の干潟に生息するハマグリやアサリなどの二枚貝は大幅に減少しており、昔のように自然に貝が湧く干潟や浅場は、例外はあるが、現在ほとんどないそうです。また、干潟の生き物の多くは、赤ちゃんの時に浮いて海を漂うため、資源の再生を図るためには、広い視野で資源の動向を調べる必要があるとのこと。

更に、近年問題となっているナルトビエイなどによる新たな食害問題なども発生していることから、そうした対策も積極的に行う必要があるとのこと。

ちなみに、ナルトビエイの食害を防止する目的で、玉石を干潟にまいたり、杭を立てたり、網を干潟に被せたりしている地域もあるかと思いますが、そのポイントは、

○玉石：アサリと同じ程度の大きさ（径35mm）では効果が期待できない。

○杭：幅80cm程度のナルトビエイに対しては30cm程度の間隔で杭を並べる。

○被覆網：ナルトビエイは、水を吸い込みながらアサリを捕食するため、アサリが通過できない目合で対応する。

だそうです。保全活動を行われている皆さん、参考にして下さい。（吉）

